

ニュースレター

NO. 17

2004.7.14.

名古屋大学大学院 国際開発研究科

発行 ☎464-8601 名古屋市千種区不老町

☎ (052) 789-4953

FAX (052) 789-4951

GSID ホームページ <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

国際開発研究科 (GSID) と法人化の新しい風

大学院国際開発研究科長 中西 久枝



2004年4月1日、国立大学は国立大学法人となり、いわゆる独立行政法人化が始まった。私が研究科長に着任したのと同様である。それではGSIDにとっての法人化はどのような意味をもつのだろうか。研究科長になってからこの1ヶ月半

のあいだに考えたことを少し紹介してみたい。

最近よく教員のあいだで話題になるのは予算カットの問題であり、財政が厳しくなったことである。私たち教員は、研究費は科学研究費をはじめさまざまな研究助成金に応募して獲得していくか、あるいはJICA、国際協力銀行、世界銀行などの開発協力機関のプロジェクトを請けながらいわゆる外部資金を入れ、そのなかで自分の研究課題を追求する方向を打ち出すなどの努力が求められている。法人化のように独立採算的に大学を運営せよという動きに対しては、GSIDのような学部生のいない独立研究科の財政基盤は弱い。

こう書くと、何か暗い話ばかりのように思えるが、すでに法人化というすでにおこってしまったことをいくら嘆いてもしかたがない。状況が厳しいときほど人間の潜在能力が試されていると覚悟を決めるしかないと思う。私は個人的には法人化は、以下に述べる3つの点でGSIDにとってポジティブな面をもっていると考えている。それは特に法人化によって、大学の存在そのものに競争原理が働き始めたことからおこっていることである。

第一に、法人化とは、カリキュラムなど教育内容や学生の就職先などの実績や教員の研究・教育・業務運営について、さまざまな形で競争原理が働くシステムに移行することである。私企業と違って、研究・教育機関である大学に競争原理が働くのは、長い目で人材を育成したり研究成果をあげたりするという本来大学が担っている研究、教育機

関としての性格になじまないという意見も一部にはある。しかしながら、多くの指導生を抱え修士号や博士号の授与率で実績を上げている教員や人並み以上に研究業績をあげている教員が、より優遇される評価システムがまだ十分できていない現実は見直されるべきであろう。教育と研究で実績をあげた教員に対し、よりインセンティブが与えられるような環境が望まれる。こうしたこれまでの制度を見直し、新たな評価システムを導入していくことは、旧態依然とした制度に新しい風を吹き込むことになり、組織としての力がより活性化するチャンスではないだろうか。

第二に、GSIDの時代に対する敏感さである。競争原理の問題と連動するが、学生の集客力のない大学や大学院が淘汰されていく荒波にもまれる時代が法人化とともに到来したということは、大学で教えるあるいは学び合う学問が社会的、時代的なニーズに応えうものにならないという意味である。私はすべての学問が実学指向になる必要はないと考えている。しかし、本来社会的に即戦力をもつ教養や知識とは何かということから離れて、教員ひとりひとりの趣味で内容が決まるような授業が大学で平気で行われてきた事実も否めない。この点で国際開発研究科にはこうした時代の推移には敏感な教員が多く、将来性が高い大学院としての潜在性が高い。

第三に、GSIDのもっている学生の多様性である。社会に出たときに実践力がある人材を生み出すことが競争力のひとつであるのなら、国際性豊かな人材をいかに創出できる機関であるかどうかは、グローバル化が進展する現在、最重要課題であろう。GSIDには、現在40カ国からの留学生が学生の半数を占め、名古屋大学の留学生の6分の1の学生を引き受けている。まさに、日常的に多文化共存型社会のミニチュアである。そうした国際的な環境で日々もまれていく学生たちは、刻々と変化する時代に適応する能力を持ち備えて巣立っている。法人化によるきびしい時代の到来は、新しい組織と新鮮な力をもった学生たちを生み出す絶好のチャンスでもある。

2003年度学位授与状況

2003年度に当研究科より授与された博士学位数は、論文博士1名、課程博士20名（うち留学生12名）。課程博士取得者を専攻別で見ると国際開発専攻（DID）14名、国際協力専攻（DICOS）2名、国際コミュニケーション専攻（DICOM）4名となっている。一方、修士学位取得者は74名。



国際開発専攻



国際協力専攻



国際開発専攻



国際コミュニケーション専攻

2004年度入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	(42)〈30〉 69	(18)〈19〉 30	(16)〈16〉 26
国際協力	(32)〈16〉 55	(22)〈14〉 34	(17)〈14〉 28
国際コミュニケーション	(36)〈31〉 53	(18)〈8〉 23	(18)〈8〉 22
合計	(110)〈77〉 177	(58)〈41〉 87	(51)〈38〉 76

注) () は女子、〈 〉 は外国人留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者	合格者	入学者数
国際開発	(7)〈14〉 16	(6)〈11〉 12	(6)〈11〉 11《6》
国際協力	(7)〈10〉 12	(5)〈7〉 9	(5)〈7〉 9《5》
国際コミュニケーション	(10)〈7〉 18	(5)〈4〉 10	(5)〈3〉 9《5》
合計	(24)〈31〉 46	(16)〈21〉 31	(16)〈21〉 29《16》

注) () は女子、〈 〉 は外国人留学生、《 》 は進学者で内数



今回はDIDで博士学位を取得し、今年度より富山大学経済学部経営学科に就職された李瑞雪さんにお話を伺いました。李さんは「物流システム論」を担当するほか、複数教員で「流通総論」を分担し、演習も二つ（2年次・3年次）担当されているそうです。

博士論文執筆で最も苦労されたことは何でしょう？

私の場合、現地調査が論文の成否を決めるほど重要でしたが、調査対象に承諾をもらって協力を引き出すことに大変苦労しましたね。必死にあっちこちに依頼状を出して、返事のあった20社以上に研究目的や調査方法の詳細を説明し調査協力をお願いして、そのうち色よい返事が来たのはほんの数社でした。

李さんは自主ゼミや研究会なども積極的に主催されていたよね？

GSIDには中国からの留学生を中心にした「中国開発研究会」という任意団体があります。主な活動内容は、勉強会や講演会などを通じて中国の経済・社会の諸問題について議論し、情報交換もします。負担に感ずる時もありましたが、得られたものはそれを遙かに上回りました。2002年夏頃には私の発案で共同研究プロジェクトを立ち上げ、その成果として『変わる中国、変わらない中国』（櫻井龍彦・李瑞雪編、全日出版）を上梓できました。

学会活動（研究発表等）は行っていましたか？

2002年の秋に所属学会の全国大会で報告しました。学会で報告してみると、専門的にレベルの高いコメントをいただいたり、知らない先生から激励の言葉を掛けられたり、同じ分野の先輩研究者と接触できたり、予想以上の収穫でした。また、学会報告のあと学会誌に投稿した際、匿名査読の先生から濃密なコメントを得られました。これはとても勉強になりました。

大学への就職について、何かアドバイスはありますか？

私も要領が分からないまま就職活動を始めたものですから…。結果から見ると、応募条件が自分の専門分野と一致するかどうか重要じゃないかと感じました。的を絞って応募先を選んだ方がいいかもしれません。ご承知の通り、応募書類を作るのには多大な時間とエネルギーを費やしますから。

ちなみに就職前の出版物は？

3本のレフリー論文と、著書は共著2冊、共編著1冊です。あと学術論文ではありませんが、物流関係の研究所が発行した二つの調査報告書の編集作業にも携わりました。

GSIDの教育、研究体制について何か意見はありますか？

何と言っても、やはり多様な分野の教員がいらっしやっで、多彩なバックグラウンドをもつ学生が集まる場所から、お互いに議論するだけで自然に刺激を受け、ヒントを得ることが多いです。もう一つ、私の所属したゼミの後期課程の学生を中心に読書会を開いていましたが、これが非常に勉強になりました。分厚くて難解そうな本でも、読書会という形で読むと意外とすらすら読んでしまい、議論を交わす中で理解も深まりました。

後輩に何かアドバイスがあればお願いします。

私がアドバイスできることはありませんが、4年前の入学式で当時の研究科長である長田先生が述べられたある言葉は、一貫して私の院生生活の指針となっていました。それは「博士課程においては知識のインプットだけではなく、少しずつアウトプットしなければならない」というようなお話だと記憶しております。つまり、知識の吸収に没頭するのではなく、少しずつでも論文を書くアウトプットの作業が必要で、こうした積み重ねが博論の完成に繋がるのだと思います。

GSIDの留学生に何かアドバイスがあればお願いします。

留学生にとって、GSIDは非常に恵まれた環境だと思います。教授陣はもちろん、日本人学生の中でも留学経験者あるいは海外勤務経験者が大半を占めており、留学生に対する理解や配慮は並はずれたものです。ただ、このような好環境にどっぷりつかるとはならず、日本語の習得も含めて、少し日本の社会や文化に関する視野を広める活動もした方がよいと思います。

その他、何かありましたらどうぞ。

共同研究のパートナーを探しています。企業物流論 (Business Logistics) を研究している方がいらっしやれば是非ご連絡下さい。



新スタッフ紹介

国際開発専攻 教授 廣里 恭史

この度、フィリピンのマニラに本部を置くアジア開発銀行より、本研究科へ着任いたしました。1994年から1998年まで、本研究科に教官として奉職しておりました（国際開発専攻、教育開発講座）。今回、再び、本研究科の一員として迎えて頂きましたことは、大変に不思議なご縁を感じております。

これまでの私の軌跡を振り返ってみますと、20数年前に途上国の教育開発あるいは教育発展に関わることを志し、この道の大学院生となりまして以来、まさに研究と教育（ピッツバーグ大学、チュラロンコン大学、本研究科）、そして開発実務（世界銀行、アジア開発銀行、タイの非営利団体）の狭間を漂ってきたように思います。私のような経歴の持ち主が、再び日本をベースとした活動の機会を与えられました意義を良く理解し、新たな気持ちでこれからの諸活動に取り組んで参りたいと思います。

本研究科の教育開発講座は、日本で最初に設置された大学院レベルのプログラムです。その設置以来、途上国の教育開発や発展に関する研究・教育と実務に携わる内外の専門家の養成を目指してきました。従いまして、これまでの試みを発展的に継承して参りますことはもちろんですが、この分野の先駆者としての教育開発講座に相応しい活動を推進し、日本、そしてひいてはアジアの教育開発分野全体の水準を高めることに貢献できるような本研究科の将来像をイメージしております。

最後に、此の方、国際開発の課題や文脈は絶えず変遷を経てきましたし、今後も変遷を重ねていくことでしょう。本研究科の学生諸君には、これらの変遷を見据える自分の座標軸を身に付けて頂きたいし、また同時に国際開発の新たな課題に挑戦するフロンティア精神と相応のスキルを培って頂きたいと思います。私自身、教育開発の一学徒として、一層の研鑽を重ねていきたく、皆様のご指導、ご鞭撻のほどを賜わりますようお願い申し上げます。

国際開発専攻 助教授 新海 尚子

2004年4月に国際開発専攻開発計画講座に着任致しました。

アメリカの大学院に在学中から修了後もアメリカのワシントンDCにある米州開発銀行に勤務しラテンアメリカにおける多国間

開発援助、経済・社会政策の分析をしました。その後、平成13年度に帰国し国際協力銀行開発金融研究所において日本の二国間開発援助の効果の研究、東、東南、南アジアにおける現地調査を通して、国際開発にかかわってきました。

私は、開発の大きなテーマの一つである貧困問題を主な研究課題としております。このテーマを主要研究課題とする一番大きなきっかけは、やはり開発途上国の貧困を実感したことだったように思います。実際に見るのと聞くのとは大きな違いで、地域によって貧困とただひとくくりにはできない違いがあるということ、まさに実感しました。開発にかかわられる方々は、すでに同様のご経験をお持ちと存じますが、ほとんどが毎日水や、よくてヤギの乳を飲むだけで、天の恵みである雨をただひたすら待つだけの生活です。また、比較的富裕な地域では、蛇口のようなものが家の中に設置されているけれども、出てくる水は、生ぬるい泥水のみで時々ヒルも混じっているというありさまです。そんな中で、人々は笑顔を浮かべながらきらきら光る目で懸命に生きていました。別に彼らに罪があるわけではないのに、どうしてこのような生活をしなければならないのだろうか、私達に何かできることはないのだろうか、というのが貧困問題を研究する始まりでした。とはいうものの、考えれば考えるほど自分の力がいかに足りないかを思い知らされました。貧困というテーマがある限り、各種開発プロジェクトや各国政府政策の効果、産業界の直接投資、雇用創出等を含んだいろいろな側面から今後とも探求させていただきます。

各国から選ばれて本研究科に入学された院生は母国の発展、また開発途上国の理解および向上のために皆はりきっています。その元気を受けて国際開発の分野で共に頑張つて参りたいと存じます。どうぞよろしくお願い致します。



Department of International
Communication
Associate Professor
IGOR SAVELIEV

Since April 2004, I have the honor and responsibility of joining the faculty of GSID. Eight years ago, having obtained a degree in history from St. Petersburg State University in Russia I was admitted as a doctoral student to GSID. I am deeply grateful to all GSID professors who helped me then to begin my research here and, later, to complete my doctoral dissertation.

After several years of teaching at the Faculty of Humanities of Niigata University I am happy to be in my alma mater again and to join GSID faculty.

In my research I focus on international migrations and inter-ethnic relations in Northeast Asia paying attention to both historical perspective and current trends. I hope my research would be of interest and of help to GSID students, especially to those who are interested in the issues of ethnicity, international migration, and intercultural communication.

Teaching and conducting research in this fascinating multicultural and interdisciplinary environment I will do my best to contribute to our Department's development.



国際コミュニケーション専攻
助教授 加藤 高志

2004年4月に本研究科に参りました。専門は言語学です。タイ北部、ラオス北部に住んでいる民族の言語の研究を、フィールドワークに基づいて行ってきました。この地域では主に、タイ系、オーストロアジア系、モン・ミエン系、チベット・ビルマ系という4つの言語グループに属する言語が話されているのですが、私が研究してきたのはチベット・ビルマ系の言語が中心です。

チベット語やビルマ語には文字があり、それで書かれた文献もたくさんあるのですが、私が研究してきた言語は、文字がないか、あったとしてもほとんど使われていない言語ばかりです。文字による言語データはほとんどなく、自分で音声を聞いてそれを文字で書いていかなければなりません。これは大変根気のいる地味な作業です。

チベット語やビルマ語には文字があり、それで書かれた文献もたくさんあるのですが、私が研究してきた言語は、文字がないか、あったとしてもほとんど使われていない言語ばかりです。文字による言語データはほとんどなく、自分で音声を聞いてそれを文字で書いていかなければなりません。これは大変根気のいる地味な作業です。

タイでは、ここ10年間、リス語という言語の調査・研究を行ってきました。現在、このリス語の包括的な文法書を書いているところです。ラオスでは、ここ5年間、アカ語、プノイ語、シラ語、ロコ語、ハニ語等の調査・研究を行ってきました。こちらはまだ、語彙調査と音韻分析を行っている段階です。

昨年度までは、1年のうち、長い時で半年、短い時でも3ヶ月はフィールドにいました。特に、7、8月は必ずフィールドにいたのですが、この時期は東南アジアの大陸部ではちょうど雨季にあたります。雨季は、道がぬかるんだり、衛生状態が悪くなったりと、フィールドワークに一番向かない時期で、苦勞が絶えませんでした。最も大変だったのは、雨季に流行することが多いデング熱という病気にかかり（それも2度目）、デング出血熱という重い症状になり、入院した時です。デング熱は1回かかると免疫ができるようですが、4つのタイプがあるらしく、そうするとあと2回はかかる可能性があるということになります。なんとかそれだけは避けたいなと思っています。

OB/OGへのインタビュー

今回インタビューに御協力頂いたのは、2003年4月に日本貿易振興機構アジア経済研究所の新領域研究センターに御就職された中川利香さんです。中川さんは、2004年3月に当研究科にて博士学位を取得されております。

現在の研究内容について教えてください。

現在、研究所で取り組んでいる研究テーマは、マレーシアのマハティール政権期に焦点をあてた金融制度と経済開発についてです。この他、個人的に関心を寄せている中長期的な研究テーマとして、①経済発展における金融制度の役割、②金融規制や制度設計のあり方、③中小企業金融、などです。

アジ研に就職するとどんなことができますか？

研究職で採用されると、たいていの場合、研究会に所属することになります。現在、アジ研で発足している研究会は40以上。アジ研はもともと経済産業省の管轄下にある組織という性格上、工業化（製造業研究）や自由貿易協定（FTA）に関する研究会が多いように感じます。地域的には、中国、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムが重点地域になっています。なお、研究職で採用されても事務部門に配属される例外も多少あります。

研究テーマはどのように決まるのでしょうか？個人で研究テーマを決めるのでしょうか？

研究所では個人研究を行うのではなく、研究会に所属して統一テーマのもとで各自が個別のテーマを設定して研究を行うスタイルです。入所1年目には研究テーマを割当てられることがありますが、基本的にはどの研究会に所属するかは研究者自身が決定します。

最近執筆された著書や雑誌論文等ありましたら御紹介下さい。

研究所に入所してから、以下を執筆しました。

論文

2003 “The Industrial Cluster Planning for Stimulating the Local Economy: Lessons from Japan”, Akifumi Kuchiki and Masatsugu Tsuji eds., *Industrial Clusters in Asia: Analyses of Their Competition and Cooperation*, Institute of Developing Economies: Tokyo., pp.315-337.

その他

2004 「通貨危機の処方箋—マレーシア型政策とその適用可能性」、『アジ研ワールドトレンド』、第103号、pp.22-25.

どのような時にやりがいを感じたり、また辛く感じたりし

ますか？

やりがいを感じるのは、私の興味関心と研究所での仕事
がぴったりと一致した時です。また、院生時代には会うこ
とができないような人に会えるのは、研究所の仕事の醍醐
味ですね。辛い時は、原稿の締め切りが迫っている時で
しょうか…。

在学期間中にやっておけばよかった、と思うことはありま
すか？

ひとつは、読書。自分の研究テーマに関する本だけでなく、
様々な分野の本を読む時間を十分にとりたかったです。
自分の「引き出し」を増やすためにも必要ではないかと思
います。また、日本の経済史、金融史をもっと勉強すれば
よかったと感じます。途上国の開発を専門とする者として、
日本の経験を途上国の開発に生かせるのか、また生かせな
いのか、という視点から歴史を見ることは大変重要だと思
います。

現在お勤めの研究所に就職希望の学生に何かアドバイスが
ありましたら、お願いします。

私はなぜ研究所に内定したのか、いまでもって不明です
(苦笑)。ですので、適切なアドバイスになっているかわ
かりませんが、参考にさせていただけたら幸いです。

私は、途上国の様々な事象を扱う研究者として、専門分
野を迫及すること、学際的な視点を持つこと、途上国の
人々の声を拾う労力を惜しまないこと、の3つが必要だと
感じています。GSIDを卒業して改めて思うのは、GSID
という所が、こうしたバランス感覚を鍛えるのに優れた所
だということです。皆さん、GSIDの強みを最大限に利用
して自信をもって研究を続けてください。

就職に関する心構えとしては、ディシプリンをしっかり
身に付けてください、ということです。研究所は地域研究
に強い所ですが、ディシプリンあつての地域研究であるこ
とを心に留めておいてください。志望動機書の書き方や面
接のテクニックに関すること、筆記試験の内容等は応募さ
れる時にご相談ください。喜んでサポートさせていただきます。
皆さんと一緒に働ける日を楽しみにしています！

院生活動紹介

ストリートチルドレンについて 考えるための会

シナイで会副代表 博士課程前期課程
小林ひかり

2004年3月21日、講演会「喰われる子どもたち～元スト
リートチルドレンを迎えて～」が当研究科 (GSID) にて

開催されました。この講演会は2005年日本国際博覧会市民
プロジェクト「21世紀型IT寺子屋」のプレ・イベントと
して、GSIDのサークル「シナイで会`shinaidekai`」と
立命館アジア太平洋大学のサークル「Sun Piccolo Pro-
ject」の共催で実施されました。講演会の目的は、世界各
地に計3千万～1億人以上いると言われているストリート
チルドレンへの認識を高め、問題意識を持ってもらうこと
を通じて、メイン・イベントを盛り上げる契機とするとい
うものでした。当日は、元ストリートチルドレンのメンダ
さん(写真右・24歳)をカンボジアから招き、実際に路上
で物乞いやゴミ拾いをして生活していた時のことや過去に
受けた虐待について、率直に語って頂きました。同世代の
日本の学生と自分の境遇のあまりの差に、一時涙で声を詰
まらせる場面も見受けられました。世界中の様々なゆがみ
によって、弱者である子どもたちが、人身売買、ドラッグ、
児童売買春などの劣悪な状況に追い込まれています。こう
した現実について豊かで安全な生活を送る私たち日本人が、
まずは「知る」ことから始めなくてはならないということ
を改めて感じさせる講演会となったように思います。約
100名の来場者からは、「無関心ではいけない」、「私たち
一人一人ができることは何かを考えなくてはならない」な
ど多くの声が聞かれ、日本には無縁と思われがちなスト
リートチルドレンの問題を考える大変貴重な機会となりま
した。「シナイで会`shinaidekai`」は『国際開発を学ぶ
学生が普段の研究活動と現実にかけている国際問題とを結
びつけて考え、少しでもその問題解決に向けて具体的に行
動する』という目的で設立されました。これまでに、ミヤ
ンマーの難民の方を招いた講演会やイラク復興支援政策コ
ンペティションの開催など、幅広い活動を行なってきました。
ご関心のある方はぜひ下記までご連絡ください。

(m030223m@mbox.nagoya-u.ac.jp 代表：村井)



『世界銀行情報コーナー』開設

情報資料室より

4月1日より世界銀行東京事務所と共同して情報資料室内に『世界銀行情報コーナー=World Bank Information Kiosk』を開設いたしました。東海地方初の世銀情報コーナーであり、大学内外の方々に広く情報発信を行うことを目的としております。

世銀がこれまで行ってきた調査・研究や開発に関する知識をより多くの方々と共有し、発展に役立てることは、世銀のテーマである『貧困のない世界の実現』の重要な部分を占めています。このコーナーでは情報検索用パソコン、ビデオ視聴機器を備えており、出版物約1,800点とWorld Development Indicatorsを始めとする各種統計のCD-ROMもあわせて提供しております。

また『名古屋大学世界銀行情報コーナーHP』からは、世銀がこれまでに発行した約14,000点の出版物を無料でダウンロードできるほか、プロジェクト情報やマクロ経済データの検索をすることができます。

情報資料室では世銀と協力し、皆様の研究に役立つよう、当コーナーをさらに充実させていきたいと思っております。下記のHPとあわせてご利用くださいますよう、よろしく願いいたします。

名古屋大学世界銀行情報コーナーHP:
http://www.worldbank.or.jp/04data/02corner/corner_nagoya.html



【教 員】

H.16.3.31 退職

国際開発専攻教育開発講座 教授

大塚 豊 (広島大学大学院教育学研究科教授へ)

国際コミュニケーション専攻国際コミュニケーション講座 教授

中條直樹

国際コミュニケーション専攻コミュニケーション技術論講座 教授

山田幹郎 (愛知淑徳大学教授へ)

国際開発専攻開発計画講座 助教授

岡本由美子 (同志社大学政策学部教授へ)

国際協力専攻国際協力法制講座 助教授

久保田隆 (早稲田大学 法科大学院助教授へ)

英語論文執筆補助担当 助手

LEGE Jr., Ranson Paul

H.16.4.1 併任

研究科長 中西久枝教授

評議員・副研究科長 櫻井龍彦教授

副研究科長 大坪 滋教授

H.16.4.1 採用

国際開発専攻教育開発講座 教授

廣里恭史 (アジア開発銀行メコン地域局上席教育専門官から)

国際開発専攻開発計画講座 助教授

新海尚子 (国際協力銀行開発金融研究所エコノミストから)

国際コミュニケーション専攻国際コミュニケーション講座 助教授

Saveliev IGOR (新潟大学人文学部助教授から)

国際コミュニケーション専攻コミュニケーション技術論講座 助教授

加藤高志 (日本学術振興会特別研究員から)

【事 務】

H.16.4.1 転出

教務担当主任 伊藤嘉奈子 (大学院環境学研究科へ)

図書担当 棚橋是之 (豊田工業高等専門学校庶務課図書係長へ)

H.16.4.1 転入

教務担当主任 中川幹夫 (大学院環境学研究科から)

図書担当 夏目弥生子 (農学部・生命農学研究科から)

客員研究員の紹介

【国内客員研究員】

汪 正仁 (立命館アジア太平洋大学MBAアジア太平洋マネジメント学部 教授)

研究題目：東アジアの国際物流

期 間：平成16年4月～平成16年9月

大森功一 (世界銀行東京事務所 広報担当官)

研究題目：開発パートナーシップマネジメント

期 間：平成16年10月～平成17年3月

黒田一雄 (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 助教授)

研究題目：教育セクターの分析手法に関する研究

期 間：平成16年10月～平成17年3月

鈴木純子 (財国際開発高等教育機構 事業部主任)

研究題目：開発プロジェクトの管理運営手法研究について

期 間：平成16年4月～平成16年9月

吉川洋子 (南山大学総合政策学部 教授)

研究題目：フィリピン外交交渉

期 間：平成16年4月～平成16年6月

渡辺松男 (アジア太平洋研究センター 研究員)

研究題目：WTOと途上国の地域統合

期 間：平成16年4月～平成16年6月

石原直紀 (政策研究大学院大学COE オーラル・政策研究プロジェクト事務局長)

研究題目：国際協力の人材バンクとその活用

期 間：平成16年7月～平成16年9月

立本成文 (中部大学大学院国際関係学研究科長)

研究題目：フィールドワークと地域研究

－ミクロ・マクロ・リンクの問題－

期 間：平成16年7月～平成16年9月

井上 健 (国際機関アジア生産性機構 工業部長)

研究題目：平和構築のための人材育成

期 間：平成16年10月～平成16年12月

手島武雅 (九州女子大学文学部人間文化学科長)

研究題目：日米の先住民族政策

期 間：平成16年10月～平成16年12月

佐土井有里 (名城大学経済学部 助教授)

研究題目：マレーシアの製造業における人材育成

期 間：平成17年1月～平成17年3月

廣瀬陽子 (慶応義塾大学総合政策学部 専任講師)

研究題目：コーカサスの国際紛争

期 間：平成17年1月～平成17年3月

森田順也 (金城学院大学文学部英語英米文化学科 教授)

研究題目：英語形態論

期 間：平成16年4月～平成16年9月

鈴木昭一 (常葉学園大学外国語学部スペイン語学科長)

研究題目：スペイン・カタルーニャ自治州におけるナショナリスト政党の変容

期 間：平成16年10月～平成17年3月

【外国人客員研究員】

Mimosa Cortez-Ocampo

(フィリピン大学ロスバニヨス校教授)

研究題目：バタンガス州リパ市における開発プロジェクトとその評価

期 間：平成16年4月2日～平成16年9月30日

Puppim de Oliveira Jose Antonio

(ブラジル公共ビジネス行政大学院助教授)

研究題目：日本における環境政策の実施 (過程及び組織体制に関する事例研究)

期 間：平成16年4月23日～平成16年8月16日

Jan Oberg (平和と未来研究のための世界的基金理事長)

研究題目：平和維持と紛争の変容

－グローバルリストの視点－

期 間：平成16年9月17日～平成16年12月19日

Kazi Ali Toufiques

(バングラデシュ開発研究所シニア研究員)

研究題目：グローバリゼーションとバングラデシュ農村の制度変容－水産物加工業におけるバリュー・チェーン分析－

期 間：平成16年12月25日～平成17年3月25日

黄 建明

(中央民族大学中国少数民族研究センター副主任)

研究題目：口承文芸と非物質文化に関する研究

期 間：平成16年1月19日～平成16年4月18日

権 貞愛 (国立慶尚大学校師範大学非常勤講師)

研究題目：無助詞に関する日本語と韓国語の対照研究

期 間：平成16年4月19日～平成16年8月18日

程 薔 (上海大学文学院教授)

研究題目：中日古代歳時民俗比較研究

期 間：平成16年8月19日～平成16年12月18日

『国際開発研究フォーラム』27号は2004年8月に出版予定。出版後、掲載論文は以下のURLアドレスより全文閲覧できます。

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/index.html>